

アガベ パリーの育て方

Agave parryi

キジカクシ科 / Asparagaceae

アガベ属最高峰の耐寒性と、截形に切れた銀灰色の葉が際立つ「アーティチョークアガベ」。先住民が「mescal」として大切にした北米屈指の食文化植物を、種から育てる。

基本データ

🌱 成長期

夏型（春～秋生育）

🌡️ 耐寒温度

非常に高い（乾燥時-21～-29℃の記録。ただし冬は乾かす）

☀️ 日照

日なた（強い日照。徒長・軟弱化を防ぐ）

📅 播種適期

4～6月（春～初夏）

🕒 発芽日数

20～25℃で発根3日・発芽7日ほど（12日で大半）

📍 主原産地

アメリカ南西部（アリゾナ・ニューメキシコ・テキサス）～メキシコ北部の高標高

🌱 難易度

🌱 概要・魅力

Agave parryi（アガベ・パリー）は、アリゾナ・ニューメキシコ・テキサス西部からメキシコ北部（チワワ州・ドゥランゴ州）の標高1,200～2,800mに広がる草原やオーク・マツの混交林に自生する、中型～大型のアガベです。Mescal Agave、Parry's Agave などの英語通称で知られ、**アガベ属の中でも突出した耐寒性を誇るグループのひとつ**として、世界中の園芸家・コレクターから高い支持を受けています。

種名の「parryi」は、植物学者 Charles Christopher Parry（1823～1890）への献名です。Parry は1851年の米墨国境調査に同行しアリゾナのサンタリタ山地でこの植物の標本を採集しましたが、George Engelmann による正式な学術記載は24年後の1875年のことでした。標本採集から記載まで四半世紀を要した逸話は、当時の植物探索の壮さを物語っています。

アガベはCAM型（景天酸代謝型）光合成を行う植物です。夜間に気孔を開いてCO₂を取り込み、昼間は閉じることで蒸散を最小限に抑えます。このしくみが高標高の乾燥地での生存を支えており、「乾かしてから水をやる」という栽培の基本にも直結しています。

Agave parryi は変異に非常に富んだ種群で、現在以下の**変種・亜種**が認められています。

- **var. parryi（基本変種）**：アリゾナ中央～南東部に広く分布する標準型。灰緑色の葉と黒褐色の頂刺のコントラストが美しく、**子株（サッカー）を旺盛に出してコロニーを形成する**のが大きな特徴。ロゼット径60～75cm程度。
- **var. truncata（アーティチョークアガベ）**：メキシコ・ドゥランゴ州の標高約2,450m産。**葉が極端に短く幅広く（10～30cm×7～12cm）、葉先が截形（平らに切り取られたよう）～凹形になるのが最大の特徴で、種小名「truncata（截**

形の）」はこの形質に由来します。青灰～銀灰色の葉色と赤褐色の縁歯のコントラストが際立ち、**子株をほとんど出さない点も基本変種との大きな違い**です。園芸市場で最も人気が高く、流通個体の多くはナーセリー由来の組織培養クローンです。

- **var. huachucensis（ワチュカ・アガベ）**：アリゾナのワチュカ山地にほぼ固有の**最大型**。葉長は最大65cm、ロゼット径75～90cmに達し、花も変種中で最大です。
- **var. couesii（クーセス・アガベ）**：アリゾナ北西部に分布する最小型。葉は比較的細く幅が狭め、花被片先端に細毛が密に生える点が識別に役立ちます。
- **subsp. neomexicana（ニューメキシコ・アガベ）**：ニューメキシコ州固有で、**亜種群中最強の耐寒性（記録最低気温-29℃、USDA Zone 5）**を誇ります。デンバー植物園での屋外栽培実績もあります。

var. truncata を他の変種から見分けるポイントは4点です。**葉が著しく短く幅広い（縦横比が他変種と明らかに異なる）こと、葉先が截形～凹形になること、子株をほとんど出さないこと、そしてより強い青灰～銀灰色の葉色**です。この4点がそろえばほぼ間違いなく truncata と判断できます。

「メスカレロ・アパッチ」という部族名は、この植物に由来しています。スペイン人が、アガベ（mescal）を主食として土窯で蒸し焼きにして食べていた彼らを「mescal の人々（Mescalero）」と呼んだのが名前の起源です。ピニャ（心部）を掘り起こして加熱した岩を敷いた土窯に入れ、濡れたベアグラスで覆って4日間蒸し焼きにするとい

う伝統調理は、西テキサスのグアダルペ山地に残る数千ヶ所のロースト痕が今も証言しています。

豆知識を3点挙げておきましょう。開花期の花茎は1日最大約10cmの速さで伸び、最終的には4〜6mに達します。開花するまでに平均15〜25年かかるモノカルピック（一回結実性）の植物で、一生に一度だけ開花して親株は枯死します。「J.C. Raulston」クローン（基本 parryi 系）は湿潤気候への適応性が比較的高く、日本の多湿環境でも育てやすいと評価されており、Agave parryi を種から育て始めたい方にとっても魅力的な選択肢のひとつです。

SEEDSTOCKでは var. truncata をはじめ Agave parryi の種子を取り扱っています。属屈指の耐寒性と独特のシルエットを持つこの植物を、ぜひ種から育ててみてください。

☀ 置き場所

Agave parryi は強い直射日光（フルサン）を好みます。光量が不足すると葉が間延びして軟弱になり（徒長）、本来のコンパクトで締まった口ゼットの美しさが損なわれます。通年よく日の当たる屋外が基本です。

雨よけと蒸れ対策が最重要

自生地は標高1,200〜2,800mの高標高で、乾燥した冷涼な気候です。冬の霜や積雪には非常に強い反面、日本の梅雨〜夏の高温多湿が最大の弱点です。蒸れが株を弱らせ根腐れ・軟腐の原因になります。軒下・パーゴラ・屋根付きの場所など、直射日光を確保しながら雨水だけを遮断する環境が理想です。スリット鉢や素焼き鉢は乾燥しやすくおすすめです。

季節ごとの管理

- **春（3〜5月）**：気温が上がり始めたら屋外をよく日の当たる場所へ。乾燥した状態を保てれば短期間の霜には耐えます。
- **梅雨〜夏（6〜9月）**：雨よけが最重要です。晴れた日は終日直射日光を当て、風通しを確保して蒸れを防ぎます。実生・幼株は成株より日焼けしやすいため、真夏の最盛期に20〜30%程度の遮光を行う場合もあります。
- **秋（10〜11月）**：引き続き屋外でよく日を当て、水やりを絞りながら冬の準備をします。
- **冬（12〜3月）**：乾燥を確保できるなら雨よけのある軒下で屋外越冬が可能です。乾燥状態であれば基本変種でも−21℃前後、subsp. neomexicana に至っては−29℃の記録があります。ただし「濡れながら低温にさらされること」が最大の危険で、乾燥した冷えには優秀に耐えます。

「直射日光＋雨よけ」がこの種の置き場所の合言葉です。日本の夏の蒸れから株を守ることが、アガベ・パリー長期育成の最大のポイントです。

💧 水やり

Agave parryi の水やりは生育期（春〜秋）と休眠期（冬）でメリハリをつけることが基本です。自生地ではモンスーン季（夏

の雷雨）を中心に降水があり、その合間に乾燥期が繰り返されます。Agave utahensis ほど極端な断水は必要なく、比較的育てやすい種ですが、過湿による根腐れには常に注意が必要です。

生育期（4〜10月）

用土が完全に乾いたことを確認してから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。「少量をちょこちょこ」よりも「しっかり乾かしてからたっぷり」のメリハリが根を丈夫に育てます。梅雨〜真夏は用土が乾いてからさらに1〜3日待つくらいが安全です。水やり後は風通しのよい場所で速やかに乾かしましょ

休眠期（11〜3月）：低温＋過湿が最大の危険

冬の低温下に過湿が重なると、凍結しなくても腐敗が急速に進みます。大株は1〜2ヶ月に1回程度、小株でも2〜3週間に1回程度を目安とし、葉が著しくしおれるまでは水やりを我慢するくらいが安心です。「乾燥した冷え」には非常に強い種ですが「湿り冷え」は致命的です。迷ったらもう数日待つ、が冬の正解です。

冬の水やりを我慢するだけで根腐れのリスクは劇的に下がります。「夏はしっかり、冬は乾かす」という水管理の徹底が、アガベ・パリーの強さを引き出す最大のコツです。

🔧 用土・植替え

Agave parryi の自生地は岩質斜面や礫地で、排水性が極めてよく有機物の少ない土壌です。この環境に適応しているため、排水性・通気性を最優先とした用土配合が基本です。

用土の配合例

- **基本配合（無機質主体）**：軽石（小粒）4＋日向土（小粒）3＋鹿沼土（小粒）3。乾きが悪ければ軽石の割合をさらに増やします。1〜3日で用土が乾く配合を目安にしてください。
- **市販ベースの配合**：市販のサボテン・多肉植物用培養土に軽石またはパーライトを3〜4割追加して排水性を高める方法も手軽です。
- **実生初期用**：赤玉土（細粒）＋鹿沼土（細粒）を1:1でベースとし、播種面にパーミキュライトを薄く敷きます。実生期は有機物・堆肥を混ぜないことが大切です（カビ・病原菌の温床になります）。

鉢の選び方

素焼き鉢・スリット鉢など通気性・排水性のよい鉢を選びます。プラスチック鉢を使う場合は底穴を複数確保し、受け皿に水を溜めたままにしないことが基本です。鉢サイズは根の量に対してやや小さめのほうが用土が早く乾きます。

植替えの時期と頻度

適期は4～6月（生育期の入り口）です。真夏と冬は避けましょう。Agave utahensis ほど成長は遅くなく、根詰まりに応じて数年に1度のペースで植替えが必要になります。鉢底から根が出てきたとき、または用土の排水性が著しく落ちたときに植替えのサインです。植替え時は古土を落として傷んだ根を整理し、切り口を数日間陰干しにしてから新しい用土に植え付けます。その後1週間ほどは水やりを控えます。

🌱 発芽のさせ方

Agave parryi の実生は、アガベの中でも比較的スムーズに発芽する部類です。最大の敵はカビ（ダンピングオフ）と過湿で、温度管理と殺菌処理を徹底すれば適温下では発根3日・発芽7日ほどで始まり、12日以内に大半が揃います。播種に最適な時期は4～6月（春～初夏）で、安定して20～25℃が確保できる頃が理想です。

var. truncata の実生について知っておくべきこと

var. truncata（アーティチョークアガベ）は子株をほとんど出さないため、実生（種子から育てること）が本変種を入手・増殖する主要な手段です。市場で広く流通しているのはナーセリーによる組織培養クローンで、遺伝的に同一の個体です。J.C. Raulston クローンなど選抜個体は組織培養や子株で維持されており、実生では親と厳密に同じ表現型が再現されるわけではありません。実生の醍醐味は、その個体差の中から優れた株を自分の手で育てていく過程にあります。

発芽までの手順

1. **用土を準備して殺菌する**：赤玉土（細粒）と鹿沼土（細粒）を1:1で混ぜた用土を容器に入れ、熱湯消毒または電子レンジ加熱で殺菌します。播種面にはパーミキュライトを薄く敷くと、発根した細い根が入り込みやすくなります。古土の使い回しは避けましょう。
2. **種子を殺菌剤＋活力剤液に浸漬する**：ベンレート水和剤（規定希釈）にメネデル（100倍希釈）を加えた溶液に種子を半日～1日浸漬します。カビ予防に非常に有効で、浸漬中に種子が自然に吸水するため発芽が揃いやすくなります。
3. **表面播きにする（覆土は薄く）**：湿らせた用土の表面に種子が重ならないようにばらまきます。覆土はしないか、パーミキュライトをごく薄く（種子の半分が隠れる程度）かける程度にします。
4. **腰水＋ラップで高湿度を保つ**：容器を水を張ったトレーに置いて腰水管理（底面給水）にし、ラップや透明な蓋で密閉して90～100%近い高湿度を維持します。上から水をかけると発根直後の細い根が折れやすいため、発芽まで腰水のみで管理します。
5. **温度を管理する**：発芽適温は20～25℃、夜温16℃以上を維持します。気温が低い時期はヒーターマットを使うと安定します。強い直射は当初避け、明るい半日陰に置きます。

6. **発芽を待つ**：適温・適湿を維持できれば3日目には発根が始まり、7日目には芽（胚軸）が顔を出します。12日以内に大半が発芽します。2週間を過ぎても発芽がなければ温度・湿度を再確認しましょう。
7. **カビ対策を続ける**：数日おきにベンレートなどの殺菌剤をごく薄くスプレーします。カビが発生した種子・苗は速やかに取り除きます。
8. **発芽後の管理（蓋外し・遮光）**：大半が発芽したら蓋やラップを少しずつ外して通気を確保します。一気に外すと乾燥で苗が傷むため、数日かけて徐々に慣らしします。直射日光は段階的に当て、最初の1～2ヶ月は明るい半日陰で管理して徒長を防ぎます。腰水は根が定着するまで継続します。
9. **鉢上げ**：本葉が2～3枚展開したら個別ポットへ鉢上げします。

SEEDSTOCKの種子は播種前に必ず殺菌剤浸漬を行うことをおすすめします。特に var. truncata は子株がほとんど出ないため実生が最も確実なふやし方です。個体差を楽しみながら、自分だけの一株を育ててください。

🐛 病害虫・トラブル

Agave parryi は適切な環境で育てれば病害虫に強い属ですが、過湿・蒸れ・日照不足に起因するトラブルが大半を占めます。早期発見と予防が最善策です。

根腐れ・軟腐（最大のリスク）

日本の梅雨～夏の高温多湿期と冬の不用意な水やりが主な原因です。低温そのものより「低温＋過湿」の組み合わせが致命的です。下葉の根元が柔らかくなる・変色する・異臭がするといったサインが出たら速やかに鉢から抜いて根を確認します。腐敗部を清潔なカッターで切り取り、切り口を数日間陰干しにしてから新しい用土に植え直します。排水性の高い用土・雨よけ・冬の断水が最善の予防策です。

アガベゾウムシ（Scyphophorus acupunctatus）

英名「Agave Snout Weevil」とも呼ばれる、アガベ類の最大の害虫です。春～夏に雌成虫がピニヤ（茎基部）に産卵し、孵化した幼虫が内部を食い荒らします。外見上は突然葉がぐったり萎れ、引っ張ると根元から崩れるのが典型的な症状で、一度侵入されると回復は非常に困難です。春（3～4月）にイミダクロブリド系の粒剤を土壌に施用することが予防として有効とされています。日本では米国南西部ほど一般的ではありませんが、アガベ栽培者なら知っておきたい害虫です。

カイガラムシ・ネジラミ

- ・ **カイガラムシ**：葉の付け根や縁に寄生し、白い綿状の塊や薄茶色の殻として現れます。綿棒にアルコールを含ませて拭き取るか、マシン油乳剤などで対処します。

- **ネジラミ（ネコナカイガラムシ）**：根に白い粉状の塊として寄生し、生育不振・枯れ込みを引き起こします。植替え時に根を観察して確認し、感染していたらオルトラン粒剤などで処理します。

その他のトラブル

- **徒長（軟弱化）**：日照不足が原因で葉が間延びします。直射日光を十分に当て、水やりを控えることで予防します。いったん徒長した部分は元に戻りません。
- **葉焼け**：長期間室内に置いた株を急に強い直射日光に当てると発生します。数日かけて段階的に光量を増やす順化が必要です。
- **カビ（実生期）**：高湿度管理中にダンピングオフが起きやすい時期です。播種前の殺菌剤処理と定期的なスプレーで予防し、発生したカビはすぐに取り除きます。

トラブルの大半は過湿が原因です。「蒸れない・濡らしすぎない・日に当てる」の3つを守るだけで、アガベ・パリーは驚くほど丈夫に育ちます。

栽培メモ



アガベ パリーの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp